横浜市における母子間感染の予防

母　里　啓　子
（国立公衆衛生院・疫学部）
協同研究者　野　口　有　三
（横浜市衛生研究所）
大　川　尚　美
（愛児センター）
森　　哲　夫
（済生会横浜市南部病院）

横浜市における母子間感染の予防

昭和61年１月より全国的に出産時におけるＢ型肝炎の感染予防事業が始まるに当たり，横浜市における過去10年間の成績をまとめ，今後の対策の資料とする。

昭和51年７月より，横浜市内15保健所における妊婦外来で，妊娠時，梅毒血清反応のための血清の残りを使ってＨＢＶ関連抗原・抗体の検査を行った。

その結果を検査実施年度別に表示すると，表－１の如くでHBs抗原の保有率は昭和57年度迄はほぼ２％である。そのうちのｅ抗原者は20→10％と減少したが，昭和57年度以降は抗原については愛児センターと保健所の取扱いが多いため急増し，全体像はつかめなくなった。過去の感染の指標であるHBs抗体保有率は15％→10％へと減少している。この抗体保有率を妊婦の出生年別にわけて調べると図－１に示す如く，戦時中生まれの20％を超えるものから順次低下し，特に昭和30年の後半に生まれたものでは著しい。

母子間感染の防御は昭和55年12月に第１例を行って以来，診療所→保健所→愛児センター，診療所→愛児センターへの紹介ルートも出来上がり防御件数も表－２にみられる如く，昭和58年度迄は年々増加した。

横浜市においては昭和59年10月より全妊婦のHBs抗原検査を公費で行い，市立産院である愛児センターでの母子感染予防がすすめられたが，昭和60年６月からは国の方策にそう形式に制度が改められ，国の基準を満たしつつ横浜市独自の上乗せをして，昭和61年１月より，全市的に行われ出した。（図－２）

今まで試行的に行ったものをまとめると，昭和55年12月に第一例を行って以来，主として愛児センターにおいて，昭和60年末迄に198例の対象者（ｅ抗原陽性者）に対して194例感染防御が行われ，抗原陽転化しキャリアーになったものは，その内５例であった。

母子手帳に組み込まれた妊婦検診票を使っての検診結果の届けを，昭和60年４月－９月迄の上半期分として集計し表－３に示す。参考として昭和59年10月－60年３月末迄を表－４に示す。

保健所取扱分と委託分，もしくは医師会取扱分との間に大きな差がみられる。これは妊婦検診票への記載もれや，今迄有料で行っていたものの公費請求に伴う，繁雑さのための請求もれ等，いくつかの要因が考えられるが，届出の確実さは新しい母子手帳の印刷と共に改善されるものと思われる。

横浜市の出産数，年間約37,000 人から推定すると事業初年度においてｅ抗原陽性者の把握もれは多くないと考えられる。（なおHBe抗原・抗体の検査法は昭和58年迄はMO 法以後は，ELISA法を併用した。）

表－1　妊婦のHBV抗原・抗体保有状況

検査期間	検査人数	HBsAg(+)	eAg(+)	HBsAb(+)
S51.7 −53.3	8815	182(2.1%)	19(10.4%)*	1333(15.1%)
53.4 −54.3	4395	77(1.8%)	16(20.8%)	665(15.1%)
54.4 −55.3	4942	99(2.0%)	17(17.2%)	694(14.0%)
55.4 −56.3	4793	89(1.9%)	12(13.5%)	733(15.3%)
56.4 −57.3	4095	85(2.1%)	8(9.4%)	492(12.0%)
57.4 −58.3	3877	128(3.3%)	45(35.2%)	470(12.1%)
58.4 −59.3	3805	160(4.2%)	73(45.6%)	387(10.2%)

＊　非働化血清使用

eAg(+)(%)：HBs抗原陽性中の(%)

表－2　HBV母子間感染防御実施数（S.55.12−60.12）

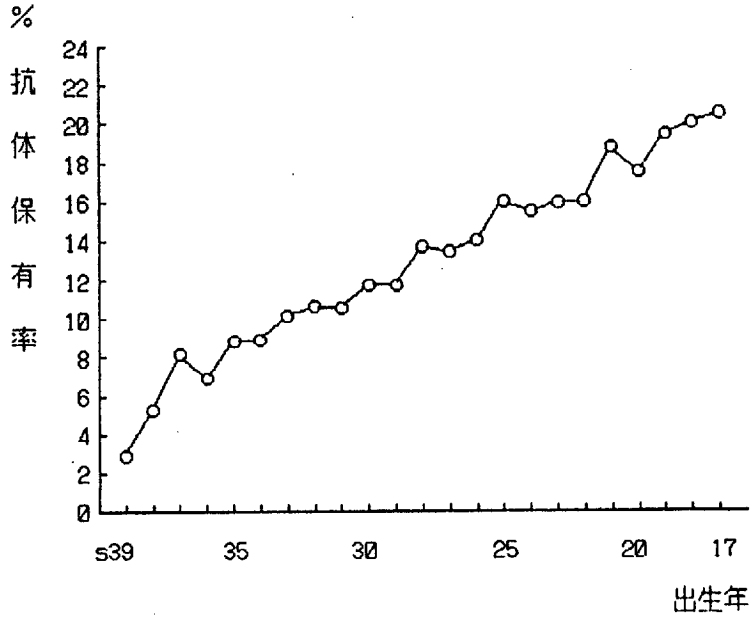
	出産数	臍帯血 HBsAg(+)	防御 実施数	抗原陽転 (キャリア)
55	1	0	1	0
56	14	0	14	1
57	27	1	26	0
58	53	1	52	1
59	55	2	53	3
60	48	0	48	0
合計	198	4(2.0%)	194	5(2.6%)

表－3　昭和60年度ＨＢウイルス母子間感染防止対策事業検査集計（上半期）60. 4. 1－9. 30

区分 保健所等の別	受診者	HBs抗原検査結果 陰性	陽性	陽性率(%)	受診者	HBe抗原／抗体検査結果 ＋／－	陽性率(%)	－／－	－／＋
保健所分	2,010	1,991	19	0.95	19	3	15.79	1	15
医師会分	12,511	12,450	61	0.49	54	9	16.67	16	29
医師会以外（愛児除く）	1,186	1,175	11	0.93	11	1	9.09	0	10
小　計	15,707	15,616	91	0.58	84	13	15.48	17	54
愛児センター	418	397	21	5.02	21	18	85.71	3	0
合　　計	16,125	16,013	112	0.69(%)	105	31	29.52(%)	20	54

表－4　昭和59年度下半期集計　59.10. 1－60. 3. 31

区分 保健所等の別	受診者	HBs抗原検査結果 陰性	陽性	陽性率(%)	受診者	HBe抗原／抗体検査結果 ＋／－	陽性率(%)	－／－	－／＋
委　託　分	14,015	13,957	58	0.41	45	11	24.44	9	25
保健所分	1,563	1,526	37	2.37	32	3	9.38	5	24
合　計	15,578	15,483	95	0.61(%)	77	14	18.18(%)	14	49

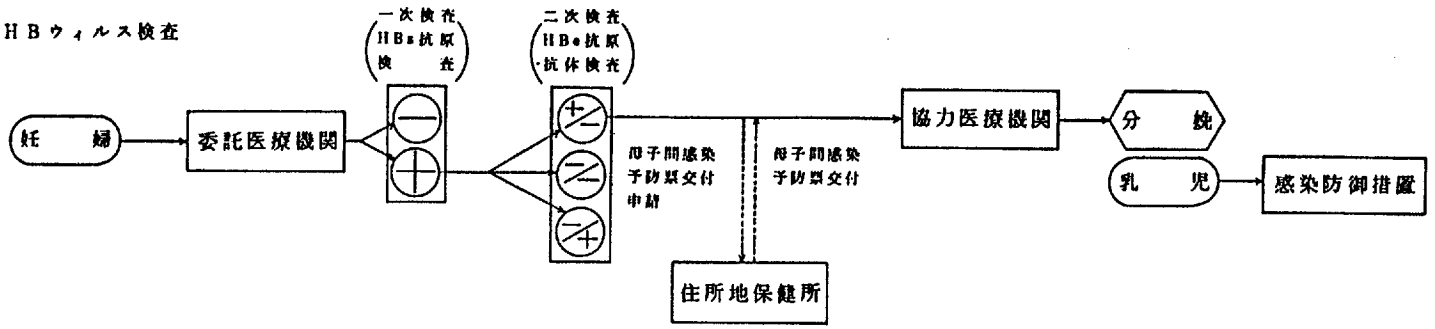


図－1　妊婦の出生年別のHBs抗体保有率

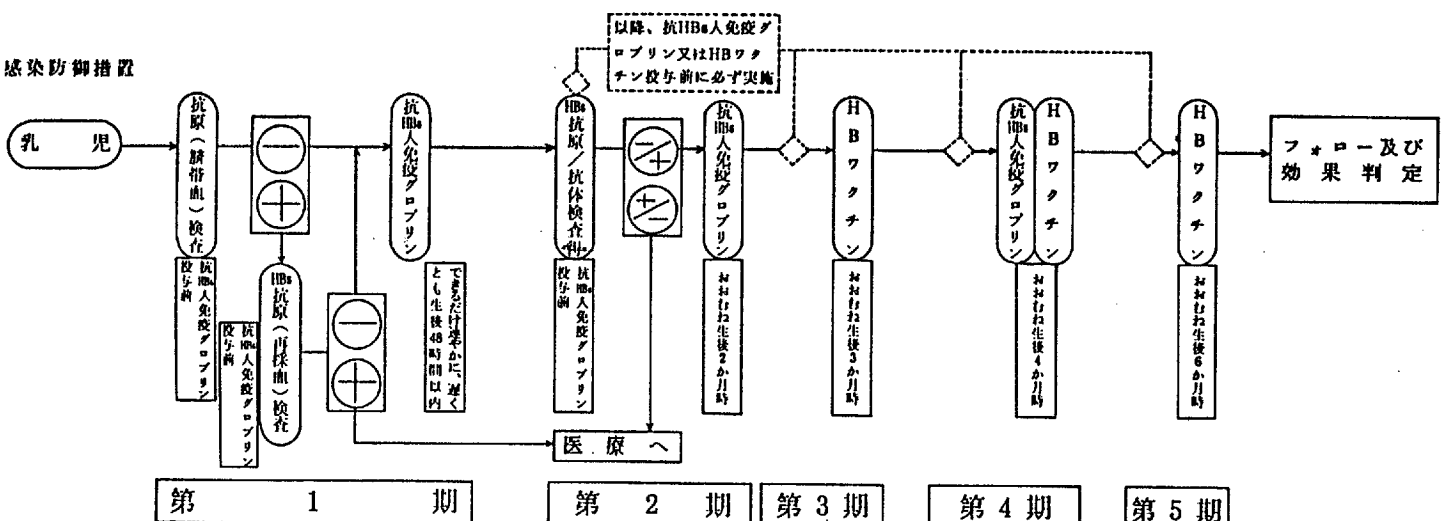
図－2　横浜市B型肝炎ウィルス母子間感染防止対策事業ルート図

1　検診ルート

(1)　HBウィルス検査



(2)　感染防御措置



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

横浜市における母子間感染の予防

昭和 61 年 1 月より全国的に出産時における B 型肝炎の感染予防事業が始まるに当たり,横浜市における過去 10 年間の成績をまとめ,今後の対策の資料とする。

昭和 51 年 7 月より,横浜市内 15 保健所における妊婦外来で,妊娠時,梅毒血清反応のための血清の残りを使って HBV 関連抗原・抗体の検査を行った。

その結果を検査実施年度別に表示すると,表一 1 の如くで HBs 抗原の保有率は昭和 57 年度迄はほぼ 2%である。そのうちの e 抗原者は 20→10%と減少したが,昭和 57 年度以降は抗原については愛児センターと保健所の取扱いが多いため急増し,全体像はつかめなくなった。

過去の感染の指標である HBs 抗体保有率は 15%→10%へと減少している。この抗体保有率を妊婦の出生年別にわけて調べると図一 1 に示す如く、戦時中生まれの 20%を超えるものから順次低下し、特に昭和 30 年の後半に生まれたものでは著しい。

母子間感染の防御は昭和 55 年 12 月に第 1 例を行って以来,診療所→保健所→愛児センター,診療所→愛児センターへの紹介ルートも出来上がり防御件数も表一 2 にみられる如く,昭和 58 年度迄は年々増加した。